
北海道大学総合博物館

No.30

ボランティア ニュース 2013.9

特別寄稿

木原 均先生小伝* ～研究と探検とスポーツと～ ①

木原 ゆり子**

父木原 均(1893-1986)は、北海道大学に学び、コムギと出会い、コムギの研究をライフワークとした植物遺伝学者であった。北大(当時は東北帝国大学農科大学)に在籍したのは大正元年(1912)から大正7年(1918)のことである。

生前、「木原均には三つの顔がある」などと言われたが、第一の顔は「研究者の顔」、第二の顔は「探検家の顔」、そして、第三の顔は「スポーツマンの顔」だという。そこで、この小伝でも三つの側面から見た父の足跡を辿ろうと思う。しかし、個々の顔について詳しく述べる前に、生涯を決定づけた中学校から大学卒業までの学生時代について触れておきたい。

北大入学まで

父は、東京生まれ(1893)の東京育ちであった。小学校は芝白金小学校、中学校は私立麻布学園である。現代の方々は麻布学園出身というと秀才を連想されるようだが、当時の麻布学園は有名進学校などではなく、他校を退学になった生徒をも受け入れる寛容な学校だった。創立者である江原素六校長の「よその学校で放校された生徒であつても、それを教育するのが真の教育者のつとめだ。」という信念に基づく校風であった。

麻布中学に入って決められた席に着くと、そこは最前列だったという。後で気がつくやうに教壇から見て最後列の左端の席が一番(級長)で、それから前に行くほど席次の低い生徒だった。父の成績は50人中45～6番だったのである。それでも、卒業時は中位の成績だったが、北大予科の受験に失敗。翌年は流行病の腸チフスにかかって入院。翌々年にようやく合格した時は、腸チフスのせいで頭がよくなったのではないかと周囲に冷やかされたそうである。

中学を卒業するころ北大を目指すようになったのは、札幌農学校出身(1887年卒業)の清水由松校長に植物学と英語を教わったことによる影響だった。清水先生は札幌農学校の話をしたり、入学を勧めることはされなかったそうだが、南米に渡って大農場を経営してみたいと空想していた少年にとって、未知の北海道は新たな夢の広がる世界だったのかもしれない。

北大予科入学、恵迪寮へ

当時、高校へ進学する学生は少なかったが、それでも浪人する者は少なくなかった。父は二浪の末に予科に入ったが、浪人中に野球クラブを作って活動するほどの野球少年だった。しかし、北海

* タイトル「木原 均先生小伝」は編集委員会による。

** 木原ゆり子氏：木原 均三女。京都生まれ。立教大学文学部英米文学科卒。早稲田大学語学教育研究所、(財)木原生物学研究所勤務を経て、木原記念横浜生命科学振興財団勤務の傍ら、自然・いのち・食・環境をテーマに研究会や講座を主宰。また、野生オオカミの生息地を訪ねて世界各地を旅する。現在は横浜市立大学木原生物学研究所「木原記念室」名誉室長・木原記念横浜生命科学振興財団評議員。著書：「オーガニック野菜の寄植え～花もコンパニオンプランツも楽しむ」(文化出版局)。

道へ行ったら野球はやるまい、あるいは、やれないだろうと考えていたのに、恵迪寮には新入生と旧寮生対抗野球試合があり、これに出て見込まれたのか、野球部に勧誘されてしまった。

同時に、スキー部にも加わって、冬はスキーを始めることになる。時は、オーストリーのレルヒ中佐によって北海道で初めてのスキー講習が行われ、それも契機となって北海道大学文武会スキー部が創設された年（1912）である。やがて、水産学科の遠藤吉三郎教授が北欧留学から帰国されてノールウェーのスキー一式とスキー術がもたらされると、とりわけジャンプに魅せられて、昼は実践、夜は理論に熱中して、1917年には小樽で遠藤先生と手作りの仮設ジャンプ台まで作ってしまった。以後、スキーとは生涯かかわることになり、全日本スキー連盟の会長（第4代）を務め、冬季オリンピックには選手団団長として2度遠征（1960年第8回スコーパーレー、1964年第9回インスブルック）することになる。

本人は、学生時代は学業半分・スポーツ半分の生活だったと述懐しているが、スポーツは半分どころではなかったようである。夏は野球、冬はスキーに明け暮れながら、ライフワークとなるコムギの遺伝学にも出会えたのは幸運であった。



北大学生時代。北大植物園にて、1916年頃
(右から) 荒木忠郎・木原均・宮部一郎・渡瀬次郎・
岡見聞多 (木原ゆり子所蔵)

英語の授業は有島武郎先生

予科の英語の先生は有島武郎教授だった。先生の翻訳は名文で興に乗ると独りでどンドン訳し続けて学生たちを喜ばせた。当時すでに同人雑誌「白樺」に小説『或る女のグリンプス』を発表されて

いて、学生のあこがれの的だった。他の教授の授業をボイコットした時も、先生に説得されるとすぐに従ったという。父は先生が朗々と詠まれたバイロンの詩の一節を覚えていて、誦んじてみせてくれたことがある。

有島先生は、新渡戸稲造夫妻が教育を受けられない貧しい青少年のために私財を投じて創立された「遠友夜学校」の代表となって、校歌も作っておられた。北大の教師や学生が無償で教壇に立ち、父も短い間だったが算術などを教えたという。有島先生作詞の校歌は父のお気に入り、「澤なすこの世の楽しみ 楽しき極みは何なるぞ 北斗を支ふる富を得て 黄金を数へん其の時か オー否 否 否 楽しき極みはなほあらん」や「日毎の業にいそしみて 心にさそふる雲もなく 昔の聖 今の大人 友とぞなしていそしまば アー是れ 是れ 是れ 是れこそ楽しき極みなれ」などと唄っていた。特に最後のフレーズを気に入って、時折「オー 否 否 否」や「アー 是れ 是れ 是れ」だけを口ずさんだりしていた。

また、恵迪寮には凍影社という文芸批評の読書会もあり、これにも父は参加していた。機関誌『辛夷』は5号で廃刊となったが、匿名で短歌を投稿したところ寮歌の作詞を頼まれ、やむなく書いて有島先生に添削していただいた。しかし、有島先生といえども元が悪いものは修正のしようもなかったと、本人は寮歌の話が出るたびに閉口して、話を逸らしたり逃げ出したりしていた。

ただ、有島先生への思いは深く、「有島武郎全集」は旧版も新版も全巻買い揃え、今も父の書棚に並んでいる。

コムギとの出会い

コムギの遺伝学を志すに至ったそもそものきっかけは、恵迪寮で行われていた開識社講演会にあった。そこで、坂村徹(北大、1913年卒業)先輩の「遺伝物質の運搬者」と題する講演に感銘を受けたのである。前述の凍影社の機関誌『辛夷』2号によれば、「科学上の知識の豊富なる演説を細密詳細に述ぶること正に一時間と十分、本日の圧巻にして又近年の開識社稀に見るの大雄弁なり。」と報告されている。後に、この先輩からコムギの

研究を托されることになるとは思ってもよらない最初の出会いだった。

本科生の時代は、植物生理学専攻の学生として郡場 寛教授の指導を受け、卒業するまでコムギの研究に縁はなかった。しかし、郡場教授が京都大学に転任され、後任の坂村徹先生がドイツに留学されるという偶然が状況を一変させた。当時、坂村先生は世界に先駆けてコムギの染色体の数が7であることを証明されており、この画期的な発見とその材料を手渡されたことで、父はコムギ研究の道を歩むことになったのである。

郡場先生と坂村先生が札幌を去られてからの大学院時代は宮部金吾博士が指導教授であった。宮部先生は、“蝦夷地”では学問の進歩が遅いと一般に思われていた時代に、真理はいかなる地方で探究されようと差異はないことを身を以て示され、学問の流れをよい方向に導かれた。父は先生の遺徳を敬慕して、『術は永遠なり』と書かれた先生の色紙を終生書斎の机に飾っていた。

クラーク博士の遺風を受けて

クラーク博士が札幌農学校に滞在したのは、1876年の夏からわずか8カ月余りである。それから36年後に父が入学した時もその影響は随所に残っていたという。

農学校時代の遺風を色濃く受けて、在学中に学び身につけたのは、植物を採集して標本を作ること、植物の名前を覚えること、労を惜しまずコツコツと努力すること、日々の観察を怠らず「自然」から学ぶこと、フィールドワークの重視、徹底的な実践・実証主義、非権威主義、チャレンジ精神等々……。いずれも北大の学風として今も脈々と受け継がれているものばかりである。

生涯の大半を北海道以外で過ごしたが、心のふるさは北海道であり、生涯の友も北大時代の仲間であった。

研究者として、探検家として、スポーツマンとして共通するフロンティア・スピリットは、まさしく北の大地で生まれ、北大で培われたものであった。

北大あれこれ① 小麦研究記念碑



ほぼすべてのゲノム構成を明らかにし、小麦の進化の解明に大きく貢献しました。ここから生まれたのが、1944年のパンコムギの祖先種の発見です。ゲノムの本体であるDNAの存在も知られていなかった時代のことでした。また、1946年の「地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に記されてある」という考えは、その後すべての生物の進化や遺伝の研究に引き継がれています。

理学部6号館の南西角にある小麦研究記念碑は、北大創基百周年(1976年)のうちに木原均博士の後輩・門下生たちにより建てられました。

北海道大学の農場には、札幌農学校時代から麦類の種ならびに品種が多数集められていました。坂村徹博士(1913年北大卒)はこれらの材料を用いて研究し、1918年に小麦の正しい染色体数を世界で初めて明らかにしました。その研究を引き継いだ木原博士は、小麦5倍体雑種の研究から「ゲノムとは生存に必要な最小の染色体セットである」と考え、1930年にゲノムの種類を同定する「ゲノム分析」という方法を世界に先駆けて確立しました。これによりコムギ属とその近縁種の

記念碑の当初の位置は、木原博士らが小麦の研究を始めた農学部北側の精密試験圃場跡(現在の理学部6号館南側の道路上の高層棟と低層棟の境界付近。左写真の古い三角屋根家屋の左手道路上)でしたが、6号館建設にともない2002年に約30m西の現地点に移設された。

記念碑には「小麦研究記念碑」と書かれた中心の石を囲むように3つの丸い石が配置されています。博士がその祖先種を発見したパンコムギ(普通系コムギ)は3つの異なる種類のゲノムからなる6倍体植物で、3つの石は3種のゲノムを表しています。デザインは高橋萬右衛門農学部長(設置当時)です。

(参考文献:北海道大学広報誌リテラ・ポプリ, Vol. 16, 2003年夏号, p. 16)

樋口敬二著「中谷宇吉郎先生小伝」を読んで

「中谷宇吉郎 雪の科学館」友の会 会員 佐竹 正治

2012年の中谷宇吉郎先生の没後50年に当たり、直弟子であった孫野長治先生(石川県小松市出身)に師事した私は、中谷先生から見ると孫弟子に、寺田寅彦博士からみると曾孫弟子にあたり、加賀市にある「中谷宇吉郎 雪の科学館」友の会会員でもあることから、4月14日加賀市で開催された「中谷宇吉郎没後50周年記念シンポジウム」と、お墓詣り、6月には「北大総合博物館」の中谷先生の展示、12月9日雪の科学館での講演会「没後50周年 宇吉郎・寅彦を語る」に参加したりして、忙しい中谷先生に関する一年を過ごした。

1964年に北大に入学した私は、中谷先生没後7年であることから、当然にして警咳に接することはなく、随筆や著書で知っているだけであった。中谷先生のおおよそは把握していた積りだったが、今回、直弟子であり、かつ多彩な人脈をお持ちの樋口敬二先生が、北大総合博物館 ボランティアニュースにお書きになった「中谷宇吉郎先生小伝」を読ませて貰って、改めて中谷先生について多くの事を学んだ。

金沢四高時代に、朝永三十郎の哲学講義に感銘したこと、顕微鏡実習で「自然の研究は、まず自然を見ることから」と、後の雪結晶研究に顕微鏡写真を用いる方法への萌芽を見ることへの記述は貴重だ。次に寺田一中谷を結ぶ流れの捉え方を、寺田の海軍飛行船爆発事故解明に用いた実験的研究手法を、樋口は「問題解決型研究」とし、この研究に参加した中谷に大きな感銘を与え、後に積雪寒冷地の多くの問題(雪、凍土、霧、着氷、洪水、水資源等)に、寺田の「問題解決型研究」を展開したという見方に、それこそ寺田一中谷、そして気象学研究に実験物理学的手法を重んじ、Visible meteorology を主唱した孫野先生へとつながる系譜を知った思いでした。寺田寅彦博士のネクタイが、中谷一樋口一雪の科学館に至った経緯や、司馬遼太郎・探検家加納一郎とのエピソードも楽しく読みました。

私は1967年から北大理学部地球物理学科気象学講座(孫野教室)に所属したが、人工雪と天然雪

の検証観測(1959~1962)の余熱まだ冷めやらずの時期に遭遇したようだ。手稲山山頂の孫野先生設立、中谷命名の「北大雲物理観測所」で、雪の中心にある氷晶核の観測に従事した。

ところで、日本人は総合的プロジェクトにおいて、個々の調査研究は優秀だが、それを纏め上げるのは苦手な人種だと思うが、樋口先生の「石狩川洪水調査」での記述と同様に、中谷博士が主任研究員を務めた戦時研究「北海道、千島における霧の研究」(1943年)は、1981年に行われた釧路海霧調査で、その成果を享受でき、中谷博士のプロジェクト・リーダーとしての優れた一面を小生は知り得たと思っている。

樋口先生がマウナ・ケア山頂国立天文台ハワイ観測所に、中谷博士の言葉を色紙に書き贈呈された逸話の後で、ハワイの火山、グリーンランドの氷床にと、雪氷研究のために世界を飛び歩いた中谷博士の好きな言葉は“規模雄大”であったことを知り、中谷博士のお人柄を改めて再認識した次第です。

新たなる発見が随所にある樋口先生のこの小伝を、ワクワクさせられながら毎回読ませて貰いました。

最後に、今回の小伝の中で、富山県に居住している筆者として嬉しかったのは、中谷博士の凍土対策の成果が、現在の中国でも生かされているということ、そして、中谷博士に満州での凍上被害問題解決を依頼した、当時の満州鉄道責任者の高野与作とその三女高野悦子(元岩波ホール総支配人2013年2月9日逝去)という、富山ゆかりの人物の記述があったことでした。

筆者略歴

- 1945年 富山県に生まれる
- 1964年 北海道大学理類入学
- 1968年 北大理学部地球物理学科卒業
大学院に進み、孫野長治先生に師事する
- 1973年 (財)日本気象協会に入社
- 2006年 同協会を定年退職、富山市に居住

“発掘”された幻の満州新聞

図書ボランティア 久末 進一

戦後 68 年、そして、ことしは学徒出陣から 70 年の節目の年である。

このほど北大総合博物館植物研究室で、植物標本の制作過程で採集植物を自然乾燥させる挿み紙に使用された古新聞の中から、植物の担当ボランティアたちによって、大東亜戦争当時に日本の傀儡国家として建国され、終戦と共に消滅した幻の「満洲帝國」で発行されていた『満洲日日新聞』『満洲新聞』『哈爾濱日日新聞』の日本語三紙と、満語（中国語）新聞『濱江日報』の実物が“発掘”された。

たかが古新聞とは云え、戦時下の世相を映す歴史資料として見直してみると、埋れた史実や、秘められた興味深い記事がある。

「満州」とは中国東北部の遼寧省、吉林省、黒龍江省の三省を指し、「関東」と呼ばれるのはこれに熱河省を含む。日露戦争後、ポーツマス条約で日本はロシアから租借権を継承。1906(明治 39)年関東都督を置き、1919(大正 8)年関東庁(行政)と関東軍(軍事)に分離。半官半民企業の「満鉄(南満州鉄道株式会社)」の鉄道沿線警備を任務とする関東軍の、中国本土進出の野望が、満州事変(昭和 6 年)を経て 1932(昭和 7)年 3 月 1 日「満洲帝國」を生むことになる。この時代、満鉄の機関紙として 1907(明治 40)年創刊されたのが『満洲日日新聞』で、1927 年『満洲日報』(「遼東新報」と合併)、1935 年『満洲日日新聞』(「大連新聞」と合併)、1944 年『満洲日報』(「満洲新聞」と合併)と続き、1945(昭和 20)年に廃刊になった。当時は日本語の日刊紙だけで 50 紙以上が乱立していたが、背景に関東軍や領事館(外務省機関)、そして満鉄がからんでいた。

また、『濱江日報』(哈爾濱)は満鉄の株式参加の中国語紙で 1937 年から 1945 年まで続刊した。

満鉄系新聞の中に『哈爾濱日日新聞』も含まれるが、同紙のトップ見出しをいくつか拾ってみると「大東亜全域に亘る政戦両略態勢全し、十億の民と資源をあげて米英撃滅へ」「南海に咲いた空の神兵、パレンバン奇襲一年」〔康德 10(昭和 18)

年 2 月 16 日〕「満洲帝國協和会運動基本要綱決定、会創建の本義を発揚、國家の負託に応へん」「東亜十億を陣頭指揮、首相必成を宣揚、衆議院本会議・戦力増強案満場一致可決」(同年 3 月 8 日)とある。

また、今回発見された『満洲日日新聞』は 1938(昭和 13)年奉天市(現在の瀋陽市)敷島区協和街に本社が移転した後の紙面で、「大本營発表・海鷲果敢な夜襲、ヘスピリツサント島」「赤色の魔手を完封、防共協定参加四周年」「印度よ今ぞ起て、英の非人道断固許さず」「溜飲下がる世界史転換の狼火、けふ國際連盟脱退十周年記念日」(同年 2 月 24 日)などの見出しが躍る。



古新聞を調査中の筆者

そして、長春から「新京」と変わったのが 1932 年。「大新京日報」が改題して『満洲新聞』となったのが 1938 年。今回の発見紙は、新京特別市中央通 44 の満洲新聞社発行で、「江南進攻作戦を開始、岳州以西三百キロ、揚子江敵前渡河を敢行」「重慶撃滅へ楔」「必勝全満を圧す」(同年 3 月 11 日)。「東部印度の敵陣營皇軍の武威に震撼、前衛二ヶ師八旅団潰滅」「七隻九回に及び鬼畜米軍の病院船攻撃」「隙はまだある！巻脚絆なし脛丸出し、防空日に街ゆく“不徹底”」(同年 5 月 20 日)。「國府軍力愈よ強化」「米英軍需工業に危機」「これだこれで行かう！初の防空日國都の出撃」「物資配給はかうして、空襲下にも心配ご

無用」(同年5月19日)と、緊迫した内容である。同時期の昭和18年2月10日付け『北海道新聞』も今回発見されたが、「大詔奉載日・猛る陸鷲桂林、衝陽を強襲、超低空から巨弾の雨」「臨軍費衆院を通過」「北満前線に麗し将兵の心」「安い煙草に転向、値上げと本道の影響」と、同様にキナ臭い。

当時の断片的紙面からも、泥沼化する日中戦争の表舞台となった満州の様子が伝わる。

そして、「康德10年」こと「昭和18年」6月25日に、「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定され、同年10月21日、あの雨の神宮外苑の出陣学徒壮行会を迎えることになるのである。

戦没北大生も満州の荒野で活字に飢えながら、こうした満州新聞を読んだはずである。

(関連「ウィキペディア」参照)

[協力] 星野フサ、山岸博子、沼田勇美のみなさん。

博物館訪問

『札幌村郷土記念館』訪問記

考古ボランティア 成田 千恵子

「第13回博物館に押しかけよう会」が6月15日(土)祭囃子が賑わう雨上がりの午後、『札幌村郷土記念館』で実施され、私達ボランティア9名が参加した。

当館は東区元町に所在し、かつて大友堀の伏籠川への注ぎ口があった「大友公園」に隣接し、近くには石狩国札幌郡最古の寺刹で江戸時代に札幌村の鎮守として建立された妙見堂のある「本龍寺」がある。

慶応2(1866)年二宮尊徳の門下生の大友亀太郎は、江戸幕府の命を受け石狩平野の開拓に着手し、農業に適してナラの木が多く茂り小屋掛けに最適で、近くに川が流れ交通の便が良い場所を元村(現在の元町)とした。亀太郎はここに御手作場(模範農場)を作った。当館は大友役所の跡地にある。

亀太郎が掘った「大友堀」は、南3条から北6条までは直線に、そこから北東に曲がって、当館の裏で伏籠川に合流している。堀は田畑の用水路、排水路、飲料水、運送路等に利用された。堀は開発により一部埋め立てられたが、札幌の都作りの東西の基準線になり、札幌と茨戸を結ぶ運河(創成川)として使われ、札幌付近の開拓に大きな役割を果たした。

この地の玉葱は「札幌黄」としてかつては海外にも輸出され、現在でも幻の玉ねぎとして有名だが、明治4年に開拓使が米国から種子を輸入して試作したのが始まりである。その後、札幌農学校

教師ウイリアム・P・ブルックスの指導を受け栽培された。

当館の1階には馬車を引くドサンコ馬、明治期の茶の間の再現、玉葱耕作や一般作業に使用した農道具類、馬具等を展示している。2階には明治43年建築の庁舎の縮小模型、生活用具、大友亀太郎の古文書、資料、教科書、村内で発行された資料や札幌市指定文化財第1号の丘珠獅子舞の資料、紙芝居の台本等を展示している。これらの貴重な資料は私達に、獣が住む原始林を切り開いた先人の苦労を伝えてくれる。



札幌村郷土記念館前にて、筆者は右から2人目

この会に参加した私は、通信大学で文化財歴史科を学び昨年学芸員の資格取得を機に、学びを社会に還元しようと今春から考古ボランティアを始めましたが、造詣が深く発掘調査の経験豊富な先輩に助けられています。

アメリカ・ユタ州での恐竜研究

化石ボランティア・理学部地球科学科4年 吉田 純輝

6月下旬から7月上旬のユタでは最高気温38度など珍しくない。ケン・カーペンター博士が最後に見た雨は4月だという。暑く乾いた大地は植物にとって不都合だが、化石を掘るには好都合である。ユタ州では様々な時代の地層が露出し、様々な化石が産出する。



発掘中の著者

高校卒業まで東京にいた私は国立科学博物館の真鍋真先生に勧められ北大に入学、普段は博物館の小林快次先生と理学院の伊庭靖弘先生のもとで古生物学を学んでいる。化石ボランティアでは貢献する気はあるのだが、結果的にいつもお世話になってばかりいる。先日も研究のためのレプリカをつくっていただいた（ありがとうございます）。

そんな私は昨年9月、ユタ州でカーペンター先生（ユタ州立大学プレヒストリック博物館）と共に化石発掘をしていた。それがきっかけで、先生が勤めている博物館におかれた恐竜（竜脚類）の化石を現在、私が研究している。そして今年の6月下旬から約2週間、自分が調べている標本に加え、同じ地層から発見されている他の竜脚類化石の調査のため再びユタ州を訪れた。

竜脚類は首が長く、4足歩行の植物食恐竜で、一般的に恐竜の中でも大きいほうだ。私が観察している標本もおそらく全長15m以上もあるだろう。ゆえに大腿骨などは1.4mほどにもなる。また重さに加えて、竜脚類の脊椎の場合は薄い部分が多く複雑な形状をしているので手を添えるところ

を間違えると破損しかねない。それらを動かし観察するとなると大変なものである。去年は筋肉痛に襲われることもあった。なかには一人ではびくともしない標本もあるため、誰かに一緒に持ってもらったり、フォークリフトを動かしてもらったりしながら標本観察をおこなう。室内にもかかわらず午前が終わると汗をかいていたことに気づき、レストランでボリューム満点のランチを平らげる。夜遅くまで観察していると、標本を運んだ際にくらっとすることがあるので、夜10時以降は化石を動かさないと自主ルールを決めたほど。研究は肉体的にも楽ではない。



化石運搬中のフォークリフト（ユタ州立大学プレヒストリック博物館）

私が調べている竜脚類の化石は Mussentuchit 部層という地層から発掘された。Mussentuchit とはナバホ（ネイティブアメリカン）の言葉で Have a fun という意味である。研究することは私にとって決して簡単なことではないが、楽しんでいこう。そしていつか皆さんにも楽しいと思っていただけるような成果を出したい。



「チタン・インプラント革命」を拝聴して

図書ボランティア 中井 稚佳子

昨年7月よりボランティア活動に参加しています。よろしくお願ひします。

6月21日、北大名誉教授久保木芳徳氏のインプラントについての講演がありました。

インプラントは失われた歯の根の部分に人工歯根を入れることにより、今までの自分の歯と少しも変わりなく物を咬めるようになる画期的な治療法です。

インプラントの歴史は古く、7世紀のマヤ文明の遺跡から20代の女性の前歯にアコヤ貝を加工して骨に結合させたものが発見されています。そして1953年にスウェーデンのブローネマルク教授がチタンと骨（アパタイト部分）が完全に結合することを偶然発見し、それを人体に応用したのがインプラント治療の始まりです。

久保木先生はこのチタンと骨が結合する生化学的メカニズムの解明を長年研究され、2012年にジブリングタンパクと呼ばれる4種類以上あるリンタンパク質がチタンに結合することを発見しました。

インプラント治療は一般化して多くの歯科医が施術していますが、口腔外科の技術と経験が必要なたため歯科医の技量に大きな差異があるのが実情です。その原因は歯学部が多さにあります。現在

日本の歯科医師数は10万人もいます。しかも歯科医師の国家試験に実技試験がないため初めから歯科医に向かない人もいることとなります。その一方で人口が減少し歯科予防教育の普及により虫歯数も減少しています。そのため一般歯科治療のみでは歯科医院経営が成り立た



筆者

ず、倒産や廃業する歯科医院が続出しています。こうした中、歯一本15万円以上と高額で治療も長期間になるインプラント治療が注目されるようになりました。

このような現状を打開するためには大学の歯学部の定員を減らし、且つ歯科医師の再教育が必要だと、オランダの歯科医療改革の成功例を挙げながら久保木先生の講演は締めくくられました。

当日はバングラデシュや中国からの留学生も聴講し、久保木先生の歯科医療改革に対する熱い情熱が静かに語られる印象的な講演となりました。



右から4人目が久保木先生

- ◆編集・発行：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：石川、沼田、星野、永山、山岸、児玉）
- ◆発行日：2013年9月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-4706
- ◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>